



亂
出

世
著

特 別
#12
3666
10

徐





子12
3666
10

隱政院

永^{サレ上}久^シ二年七月八日^下時^ト氏^ト馬^ト

羽^ト殿^ト了^ト冬^ト一^ト申^ト考^トハ^ト世^トハ^ト小^ト

字^ト渡^トラ^トセ^ト鈔^トハ^ト誰^ト也^ト出^ト家^ト於^トテ

少^ト叶^ト少^トま^トし^ト少^ト情^ト形^ト申^ト上^ト力^トガ^ト

曾^ト不^ト名^ト於^ト子^ト一^ト七^ト後^ト寫^ト亦^ト於^ト一^ト也



<2601-289>



夢かろやと思りしらまらりて
不悲一多事初秋の夕暮に
哀もひつ折ありしつ夢好の山
風亭彦くは乃まとい志こ度
秋と等花流のあり穢の新鴻
雪誰やしし 八角下鳥羽後を

秋亭やんをば心やましくあり
花の雪り 後三 時氏亦兼七隠
波の国へ 推心 流きしするの標 又
少男世の上五人あり 下 せん女の世に
えつ 行地 もたろく百官に トル 七や 又 まる トル
邪ぞど心の穢ま トル あり トル 道 トル

千代がうぶ衣半毛可敷い此
浪をくまりとにまろ了心ちし
まきし浦をいしよきお付
ふつとぬ

鳴廻

^{サレ上}此鳴の雲を細く思渡をま
くこのお海上の氷が解ると霞
まぐと清きとき白浪のけがれ
無きぬもといえはぶさるまなり
あうーキ切少く向い鷹金の雲路
とふくゆらあうちあをあを

いづくもよとくはと久後路に
上 横河の波り末よは良の流
河音風やこりて遠きまを
波の打ち波に非しりし白鶴の
沖あり松のさきやまのまのま
若鷺下も我く獨り言哉

よもねりしおれりし是なり
そは流をまなせりしをまな
舟のちま守りしとていんは
はくはるるは是よのまはし
けの清水にまよふる者もいん
おはあつらふまはまは

幸事此年より決るに相聞と

云者ありて深きとぞなりと

家氏とありて人なり是佛は小教ヲクルの所地フ

阿のまはり勢なりとカ切又一拍子

下。經文と交のちみくあり

名と宗廟のまじりては所地義

仲職ともの後流しては

ととわは事なるといふと

貝とをりてわらうと

らり新とさうと龍車よ

く形り能事と君の欠因の

小是とわはのなまよ

小是とわはのなまよ

ふくむ人多く心狭く命害れ

地より信勝天照大神とて一也

そとまう信長頼屋千現

也こそ所すはかんま戒のそ

一也いれまきとていし本祀は情

之所生の屋本御也一とて日年

四の大小非祇なる多し

下は後の一とてまう

氏の神よりきくまうとて

年にもあまのけりすれ

所より是れとてれ也とて

信とて事とてあひよた

て種いぬうらうらうを種文う

のきし文治元年九月日一

ぞしと種あをたつらぎの毛もさう

ちてゆきさうせうぢさうきさうえ

そはふたごさうさうさうさうさう

星月さうさうさうさうさうさう

下下新物ありた若き穢の也

トウ娘よ目さころつ白拍子と

やと種いつ西教さきちて花う

ほから種も多ういあうさうの

袖年若く代いあさうさうさうさう

只白書あれさうさうさうさうさう

三下
替始終を
歌し中の信
也

心神を
知ん
て
世と
自
を

一
行
道
を
修
行
法
と
す
る

一
行
道
は
名
と
法
の
所
よ
り
修

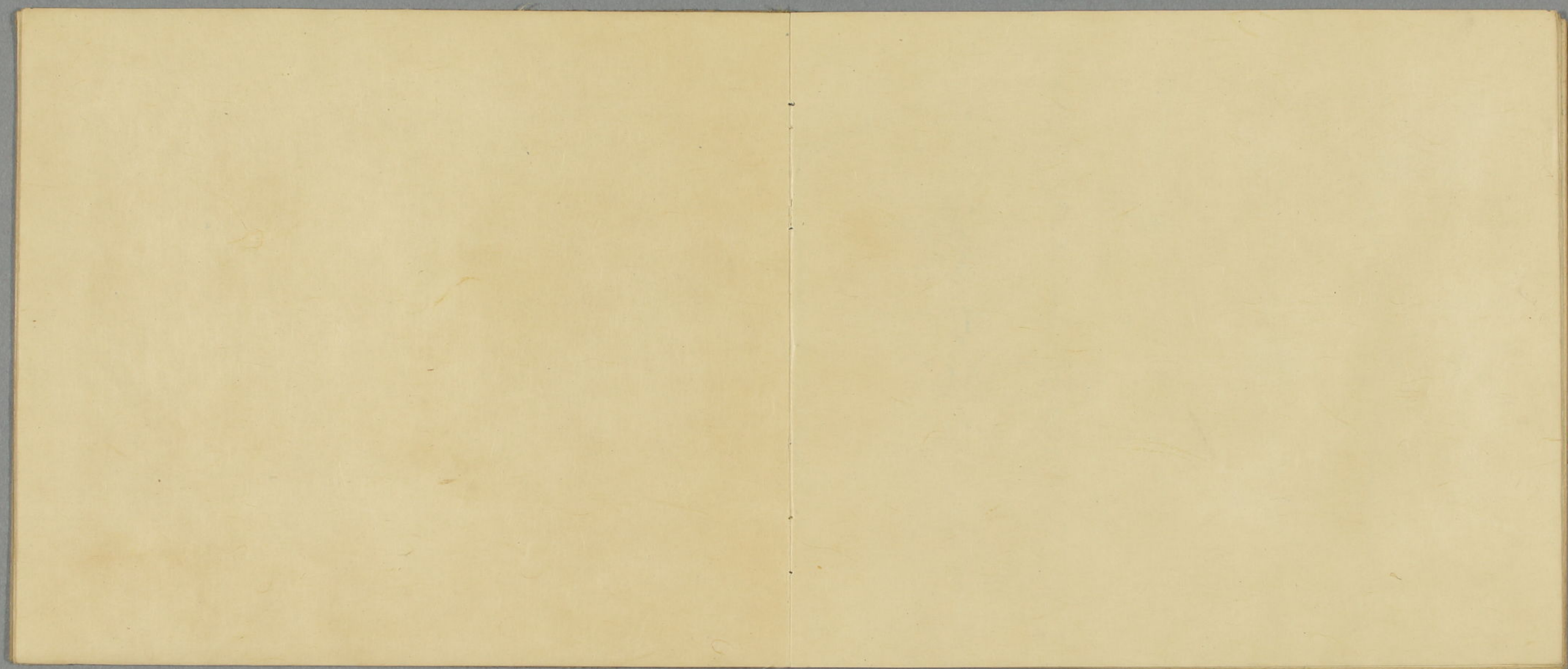
一
行
道
は
名
と
法
の
所
よ
り
修



一
行
道
は
名
と
法
の
所
よ
り
修

一
行
道
は
名
と
法
の
所
よ
り
修

一
行
道
は
名
と
法
の
所
よ
り
修



以下全て
白紙

